

## 能楽「羽衣」

ワキ 「風早乃。三保乃浦曲を。漕ぐ舟乃。浦人騒ぐ。波路かな」

「これ三保乃松原に。白龍と申す漁夫にて候。

「萬里乃好山に雲乍ちに起り。一樓乃。明月に雨。初めて晴れり。」

げに長閑なる。時しもや。春乃景色。

「松原乃。波立ち続く。朝霞。月も残り乃。天乃原。」

及びなき身乃。眺めにも。心そらなる。景色かな

「忘れめや。山路を分けて。清見瀉。遙かに三保乃。松原に。」

立ち連れいざや通はん。立ち連れいざや通はん

白龍 今日風が早くて波が高くなりそうだ。三保の浦で船を漕ぐ

漁師たちが騒ぎだした。自分は、三保の松原に住む白龍という漁師。

ずっと遠くの方まで連なっている美しい山々にかつている雲があつとい

う間に消え去り、雨が上がったばかりなので楼上の月は暗暗と照り

輝いている、と昔の人が詠んでいるように、のどかな春の景色だ。

松原の向こうで、波が立ち続いて、朝霞がかかっている。月が残った空

が美しい。下賤で野暮な、こんな自分でもうっとりするほどの美しい

眺めだ。山路を踏み分けて来た清見瀉で、遙かな三保の松原を眺め

たその素晴らしさは忘れられない、と昔の人も歌っている。

そんな美しい松原に、一緒に通おうではないか。

ワキ 「風向かふ。雲乃浮波。立つと見て。雲乃浮波。立つと見て。

釣りせで人や。帰らん。待て暫し。春ならば。吹くも乃どけき。

朝風乃。松ハ常磐乃。聲ぞかし。波ハ音なき。朝風に。釣人多き。

小舟かな。釣人多き。小舟かな。

われみお まじなひ あか うら けしき なか とろろ へんじつ はなぢ おんかく	「我三保乃松原に上り。浦の景色を眺むる処に。虚空に花降り音楽	お、この松に美しい衣がかかっている。近寄って見てみると色も香りも
あし れいか よろ くん なちよこ おも とろろ まじ うしつ	聞え。霊香四方に薫ず。これ常事と思はぬ處に。これなる松に美し	素晴らしく、普通の衣ではない。よし、持ち帰って古老にも見せて、家
うんもか けい	き衣懸かれり。寄りて見れば色香妙にして常乃衣にあらず。いか	宝にするとしよう。
と かえ きる ひと み ぐいえ たから せん そうろう	さま取りて帰り古き人にも見せ。家の寶となさばやと存じ候	シテ 「なう。そ乃衣ハ此方乃にて候。何しに召され候ぞ
白龍 風が吹いて雲がまるで本物の波のように押し寄せるのを見て、	漁師たちが釣りをしないで帰ろうとしている。おうい、待て待て。今	天人 もし、その衣は私のものです。何故持っておられるのですか。
は春なのだから吹く朝風はのどかなもので、松の葉の色と同じよう	にいつもと変わりない。ほら、波の音も立たない朝風だ。釣人の乗った	ワキ 「これハ拾ひたる衣にて候。程に取りて帰り候よ
小船がたくさん沖に出て行っているのが見える。	舟から降りて三保の松原に上がり、浦の景色を眺めていると、不思議	白龍 これは自分が拾った衣だから、持ち帰って家宝にするのだ。
議ならことに空から花が降り、音楽が聞こえてきた。何とも言えない	香りまで立ち込めている。これはただのことではないと思っていると、お	シテ 「それハ天人乃羽衣とて。たやすく人間に與ふべき物にあらず。
		もと乃如くに置き給へ
		天人 それは天人の羽衣なのです。容易に人間が持つべきものではありません。
		ワキ 「そもこ乃衣乃御主とハ。さてハ天人にてましますかや。さも

あらば末世乃奇特に留め置き。國乃寶となすべきなり。衣を返す

事あるまじ

白龍 なんと。「この衣の持ち主ということは、さては天人であられ

ましたか。それなら、なおのこと、末代までの家宝として残り、国の宝

にすぎない。衣は絶対に返しませんぞ。

シテ 「悲しやな羽衣なくて、飛行乃道も絶え。天上に帰らん事も

叶ふまじ。さりとして、返し賜ひ給へ

天人 悲しいです。羽衣がないと飛行の手だてがなくなり、天に帰る

ことができません。ですから、どうにかお返し下さい。

ワキ 「この御言葉を聞くよりも、いよいよ白龍力を得。もとより

この身、心なき。天乃羽衣とり隠し。叶ふまじとして立ち退けば

白龍 このお言葉を聞くや否や、ますます白龍はいい気になって、

元々自分は賤しい漁師であるし、情けをかけてやることもない、と思

い羽衣を隠してしまつた。返すことはできないう、と言つて立ち退くと、

シテ 「今なきながら天人も。羽なき鳥乃如くにて。上らんとすれば

衣なし

天人 このようなことになつては天人も羽を失つた鳥の様なものです。

天上に上がろうとしても衣が無くてはかえません。

ワキ 「地に又住めば下界なり

白龍 地に住めばそこは人間の世界で天人のいるべき所ではない。

シテ 「とやあらんか、やあらんと悲しめど

天人 ああ、私はどうすればよいのでしょうか、と悲しむのですが、

ワキ 「白龍衣を返さねば

白龍 白龍は衣を返さないのぞ

シテ 「せん方もかた

天人 もうどうしようもないのです。

ワキ 「力ちから及およばず

白龍 これ以上することもない

地謡 「涙なみだ乃露なみ乃玉鬘つゆ。挿頭たまかすら乃花かざしもしをしをと。天人てんたん乃五衰ごすいも目め

乃前まえに見みえて浅あはましや

地謡 涙が止めようも無くこぼれて、髪にかざした花もしおしおと

なつてきました。天人の五衰ごすい(\*)が目の当たりになり、何と浅あはましい

ことぞしようか。(\*)五衰ごすい|| 天人が命を落とす時に現れるという五つ

の兆候。衣が汚れ、花の髪飾りがしおれ、脇から汗が出、悪臭を放

つとつとととされる)

シテ 「天乃原あまのほら。ふりさけ見れば。霞かすみ立つ。雲路くもみちまどいて。行方ゆくえ知ら

ずも。

天人 振り仰いで天上を見ると霧が立ち込めて雲の路も分かりませ

ん。どちらへ行けばよいのか、それすら知ることができないのです。

地謡 「住み馴れし空に何時しか行く雲乃羨すなはましき景色しきかな。

「迦陵頻伽乃馴れ馴れし。迦陵頻伽乃馴れ馴れし。聲今更に僅かな

る。雁がね乃帰り行く。天路を聞けば懐かしや。千鳥ちどり鳴乃沖つ波なみ。

行くか帰るか春風乃空に吹くまで懐かしや。空に吹くまで懐かしや。

地謡 住み慣れた大空にどんどん上つてゆくあの雲がうらやましい

限りです。聞き慣れた迦陵頻伽(\*)の声も今となってはほとんど聞

こえてきません。千鳥やかもめが沖へ行ったり浜へ帰ったりする様子、

春風が大空に吹く様子まで天上を懐かしくさせるのです。

(\*)迦陵頻伽|| 極楽浄土に住む、頭は人間の少女、体は鳥という生

き物。声の美しさは、天下一品。

もさらば。人間乃御遊乃形見乃舞。月宮を廻らす舞曲あり。只今

ワキ 「いかに申し候。御姿を見奉れば。餘りに御傷はしく候

此処にて奏しつ。世乃憂き人に傳ふべし。さりながら。衣なくてハ

程に。衣を返し申さうずるにて候

叶ふまじ。さりとてハ先づ返し給へ

白龍 あの、もしもし。あなたの泣く姿を見ていると、あまりに可哀

天人 嬉しや、衣があれば天上に帰ることができます。本当に喜ば

想に思えてきました。羽衣をお返ししようかと思ひます。

しいことなので、天人が天下つた形見として月宮天女の舞曲をこぞ

シテ 「あら嬉しや此方へ賜はり候へ

奏して、世の憂き事に嘆く人々を癒すために伝えることにいたしま

天人 まあ、嬉しい。でしたらこちらへお渡し下さい。

しよう。けれども、衣が無いと無理ですので、まず返して下さい。

ワキ 「暫く。承り及びたる天人乃舞樂。只今此処にて奏し給

ワキ 「いやこ乃衣を返しなば。舞曲をなさぞそ乃ままに。天にや

はば。衣を返し申すべし

上り給ふべき

白龍 いや少し待つて下さい。噂に聞いた天人の舞樂を今こぞ披

白龍 いや、この衣を返せば、舞曲を演奏せず、そのまま、天に上

露してくださるなら衣をお返します。

がってしまったるのでは。

シテ 「嬉しや。さてハ天上に帰らん事を得たり。こ乃喜びに。とて

シテ 「いや疑いハ人間にあり。天に偽りなきも乃を

天人	いいえ。疑 <small>うたが</small> いは人間 <small>にんげん</small> だけのもの。天 <small>あま</small> に偽 <small>いつはり</small> りなどありません。	シテ	「舞 <small>ま</small> ふとかや
ワキ	「あら恥 <small>はず</small> かしかや。さらばとて。羽衣 <small>はつろも</small> を返 <small>かえ</small> し興 <small>あつ</small> ふれば	天人	舞 <small>ま</small> うとしましよう
白龍	ああ、恥 <small>はづ</small> ずかしいことを言ったと、羽衣 <small>はつろも</small> を返 <small>かえ</small> してあげたところ	地謡	「東遊 <small>あづまあそび</small> 乃駿河舞 <small>すなるかのまこ</small> 。東遊 <small>あづま</small> 乃駿河舞 <small>のすなるかのまこ</small> 。二乃時 <small>ふたのとき</small> や。始め <small>はじ</small> なるらん。
シテ	「少女 <small>おとめ</small> ハ衣 <small>ころも</small> を著 <small>ちか</small> しつつ。霓裳 <small>びじょうろうし</small> 羽衣 <small>はつろも</small> 乃曲 <small>なまげ</small> をなし	「それ久方 <small>ひさかた</small> 乃天 <small>あめ</small> と云 <small>い</small> つば。二神 <small>ふたがみ</small> 出世 <small>しゅっせ</small> 乃古 <small>のこ</small> 。十方 <small>じゅうほう</small> 世界 <small>せかい</small> を定め <small>さだ</small> めに。空 <small>そら</small>	ハ限り <small>かぎり</small> もなければとて。久方 <small>ひさかた</small> 乃空 <small>のそら</small> とハ名 <small>な</small> づけたり
天人	天女 <small>あまのむすめ</small> は羽衣 <small>はつろも</small> をまどつて、霓裳 <small>びじょう</small> (*)羽衣 <small>はつろも</small> の曲 <small>うた</small> を演奏 <small>えんそう</small> し始め	地謡	東遊 <small>あづま</small> の駿河舞 <small>すなるかのまこ</small> は、きつとこの時から始 <small>はじ</small> まったのだらう。
ワキ	(*)霓裳 <small>びじょう</small> ＝虹色 <small>にじいろ</small> の裳 <small>のび</small> のこと 「天乃羽衣風 <small>あまのつばさかぜ</small> に和 <small>わ</small> し	さて、久方 <small>ひさかた</small> の空 <small>そら</small> とは、イザナギ・イザナミの二神 <small>ふたがみ</small> が世 <small>よ</small> に現 <small>あら</small> れ天地四方 <small>あめつちよふかた</small>	を定め給 <small>たま</small> うた昔 <small>むかし</small> 、空 <small>そら</small> は限りなく広 <small>ひろ</small> がっていたことから付 <small>つ</small> けられた名 <small>な</small> なのです。
シテ	「雨 <small>あめ</small> に潤 <small>うる</small> ふ花 <small>はな</small> 乃袖 <small>のそで</small>	シテ	「然 <small>しか</small> るに月宮殿 <small>づきみやうどの</small> 乃有様 <small>のありさま</small> 。玉斧 <small>たまのきりぎりす</small> 乃修理 <small>のしやうり</small> とこしなえにシテ
天人	雨 <small>あめ</small> に潤 <small>うる</small> う花 <small>はな</small> の様に美 <small>うつく</small> しい袖 <small>そで</small> を翻 <small>ひら</small> し	天人	そして、月宮殿 <small>づきみやうどの</small> とは宝 <small>たから</small> の斧 <small>きりぎりす</small> で作 <small>つく</small> られた月の都 <small>みやこ</small> の宮殿 <small>みやうどの</small> で、決して
ワキ	「一曲 <small>ひとひね</small> を奏 <small>かな</small> で	朽ち <small>くち</small> ることはありません。	
白龍	一曲 <small>ひとひね</small> を演奏 <small>えんそう</small> して		

地謡 「白衣黒衣乃天人乃。数を三五に分つて。一月夜々乃天少女。

奉仕を定め役をなす

地謡 そこには白衣と黒衣の天女がそれぞれ十五人ずつ住み、交代

で舞うことで月を満ち欠けさせています。

(注記) 月では、毎月一日から白衣の天人が一人ずつ宮殿に入り、

それに伴って黒衣の天人が一人ずつ出て行く。十五日には白衣の天

人のみとなり、満月になる。その後、黒衣の天人と入れ替わるにつれ

て月は欠けていくとされる。(

シテ 「我も数ある天少女

天人 私もそのなかの一人です。

地謡 「月乃桂乃身を分けて。假に東乃駿河舞。世に傳へたる曲

とかや。春霞。たなびきにけり。久方乃。月乃桂乃。花や咲く。げ

に花鬘色めく春乃しるしかや。面白や。天ならで。ここも妙なり。

天つ風。雲乃通路吹き閉ぢよ。少女乃姿。暫し留まりて。こ乃松原

乃。春乃色を三保が崎。月清見鴻。富士乃雪。いづれや春乃曙。

類ひ波も松風も長閑なる浦乃有様。その上天地へ。何を隔てん。

玉垣乃。内外乃神乃。御齋にて。月も曇らぬ。日乃本や

地謡 月の天女が、月にしかない舞を地上で舞って、この東国に、駿

河舞として伝えることにしましょう。春霞がたなびいて、まるで月に

咲く桂の花の様。季節の花飾りがこんなにも美しいのは春だから。三

保の松原も天上に負けず劣らず美しい春の景色。さあ大空の風よ、

天上への道を閉ざしなさい。私はしばらくこの松原で景色を眺めてい

たいです。三保が崎も清見鴻も富士の雪も、波音や松風ものどか

な浦の景色も、ここからの眺めは並ぶものがないほどです。この天地

は、神の末裔のもの。この国には、日光だけでなく、月の光も、降り注ぎます。

を翻して、天女の舞う姿の美しさよ。

注ぎます。

シテ 「君が代ハ。天乃羽衣稀に来て

シテ 「南無帰命月天子。本地大勢至

天人 大君の平和なこの世に、奇跡のように、天女が、舞い降りて

天人 月天子の御本地大勢至菩薩に拝し奉ります  
(南無〓梵語、帰命〓仏に帰依、月天子〓月宮殿の天子)

地謡 「撫づとも盡きぬ巖ぞと。聞くも妙なり東歌。聲添へて数々

地謡 もしくは立春の霞衣と言いましょるか

乃。笙笛琴箏篋孤雲乃外に充ち満ちて。落日乃くれない蘇命路

る勢至菩薩)

乃山をうつして。緑ハ波に浮島が。拂ふ嵐に花降りて。げに雪を廻

地謡 「東遊 乃舞乃曲

らす白雲乃袖ぞ妙なる

地謡 それでは、東遊の舞曲を舞いませう

地謡 柔らかい羽衣で硬い岩山を撫で、遠い未来に岩山が朽ち果て

シテ 「或ハ。天つ御空乃緑 乃衣

ても大君の御世が続きますようにと天女が歌う。その妙なる調べの

天人 あるいは大空の緑の衣と言いましょるか

東歌を。楽器の音色が、雲間に満ちて、夕日が富士を照らし、波は

地謡 「又ハ春立つ霞 乃衣

緑に浮かび、嵐が雲を払って花を降らす。その中で、白雲の様な羽衣

地謡

シテ いろか たえ おとめ ももて 「色香も妙なり少女乃裳裾

天人 色も香りも美しい乙女の装いで

地謡 「左右左。左右颯々乃。花を翳し乃。天乃羽袖。靡くも返す

も。舞乃袖。「東遊 乃数々に。東遊乃数々に。そ乃名も月乃。色人

ハ。三五夜中乃。空に又。満願真如乃影となり。御願圓滿。國土

成就。七寶充滿乃寶を降らし。國土にこれを。施し給ふ。さる程

に。時移つて。天乃羽衣。浦風にたなびき。たなびく。三保乃松原。

浮島が雲乃。愛鷹山や。富士乃高嶺。かすかになりて。天つ御空乃。

霞に紛れて。失せにけり

地謡 花をかざした天人が、さらさらと羽衣の袖を翻し、左右左の

舞の手で舞うのです。こうして、様々な東遊を舞い、その名の通り月

の様に美しい色の天人は、十五夜の空の清らかな光となり、御仏の御

誓願の通り、国土が豊かであるようにと、天上より七宝を降らせま

した。そして、やがて、羽衣を浦風にたなびかせた天人は、三保の松

原から浮島が原へ、愛鷹山を経て富士の高嶺へ、と上つて行き、やがて、

大空の霞に紛れて、消え失せてしまったのです。